

東レ株式会社

2024年3月期 第3四半期決算説明会（電話会議）
質疑応答要旨

日時：2024年2月8日
説明者：取締役 岡本 昌彦

本資料中の業績見通し及び事業計画についての記述は、現時点における将来の経済環境予想等の仮定に基づいています。
本資料において当社の将来の業績を保証するものではありません。

<繊維>

Q. 衣料用途、エアバッグ用基布、人工皮革の動向について教えて欲しい。

A. 衣料用途は、2023年の春夏のシーズンはコロナ禍からの回復需要があり、スポーツ、ファッション、カジュアルと各用途とも堅調であったが、2024年の春夏物は各社とも発注に慎重な状況となっている。海外市況は欧州ではロシア・ウクライナ情勢の長期化、物価上昇などによる店頭冷え込みが続いている状況。北米は堅調なアパレルもあるが全体としては在庫調整局面が続いている。海外向けのテキスタイル販売は、2024年の秋冬物がスタートしているが北米向けは回復基調、欧州は低迷が続いている。縫製品関係のオペレーションは堅調に推移している。第3四半期は、国内はアウトドア・カジュアル向け販売増があり、第4四半期も欧米のアウトドア向けの販売が増えるとみている。

エアバッグ用基布の第3四半期の販売は、半導体不足緩和により自動車生産が回復し前年同期比増加。第4四半期も前年同期比増を見込んでいる。

人工皮革は上期非常に好調に推移したが、EV向けが第3四半期に若干減速し、前年同期比微減となった。第4四半期も欧米のインフレ、中国の不動産不況など先行き不透明で、第3四半期並で推移するとみている。

<機能化成品>

Q. 第2四半期から第3四半期にかけて27億円の増益となった背景について教えてほしい。

A. 樹脂事業は、国内自動車生産台数の回復を受け、当社からの出荷も増加した。ケミカル事業は、基礎原料の需要低迷は継続したが、ファインケミカルが好調を維持した。

フィルム事業は、電子部品用PETフィルムの需要は緩やかながら回復基調。上期まで続いた国内主力顧客の在庫調整が第3四半期でほぼ完了し、当社出荷も需要見合いで回復傾向となった。一方で、欧米のPETフィルム子会社は特に工業材料で市況悪化の影響を受けた。バッテリーセパレータフィルムは車載用途で、一部の当社品搭載車種の生産終了が早まったことで第3四半期は販売減となった。

電子情報材料事業は、スマートフォン用中小型有機ELパネルの生産量増加等を背景に、有機EL材料の販売が拡大。韓国子会社の回路材料は大型TV用液晶パネルの需要回復遅れの影響を受け若干苦戦した。

Q. 第3四半期から第4四半期にかけての見通しについて教えてほしい。

A. 第3四半期から第4四半期は、23億円の増益となる見通し。

樹脂事業は、自動車向けが引き続き堅調に推移する見通し。ケミカル事業は、ファインケミカルが第3四半期比弱含むと見ている。

フィルム事業は、PETフィルムにおける顧客の在庫調整が第3四半期で完了したことにより、第4四半期は更に回復を見込む。第3四半期不振であった欧米のフィルム子会社も、一部顧客の需要回復を見込むほか、収益改善プロジェクトの進捗による増益効果の発現を見込んでいる。バッテリーセパレータフィルムは、民生用途は低迷しているが、車載用途は第3四半期に搭載車種の生産終了があった一方、第4四半期で新規車種向けが立ち上がってくる見通し。

電子情報材料事業は、有機EL材料は第3四半期に一部前倒しがあったため、第4四半期は少し弱含む見通し。韓国子会社の回路材料は、パネルメーカーの稼働率低下が第4四半期も続く見通し。

<炭素繊維複合材料>

Q. 航空宇宙用途で、大手顧客のビルドレートと同社小型機の不具合問題の影響について教えて欲しい。

A. 航空機用途は第 2 四半期で見ていた前提から大きな変更はなく回復基調にある。大手顧客の 2023 年度第 4 四半期決算発表でも、今後のビルドレート引き上げ目標は従来から変更がないと公表している。

小型機の不具合問題については、当社の炭素繊維は当該機種に一部採用されているが、小型機体である上、適用部位が限られるため、業績への影響は軽微である。

Q. 第 3 四半期から第 4 四半期にかけて増収減益となる背景は？

A. 第 3 四半期から第 4 四半期にかけて、125 億円の増収、6 億円の減益となる見通し。第 3 四半期で一般産業用途の需給が緩み在庫水準が高くなったこともあり、第 4 四半期に減産を強化する計画。その減産によるコストアップが減益に効いてくる見通し。

Q. 一般産業用途の状況について教えて欲しい。

A. 風力発電翼については、洋上風力発電のプロジェクトは依然振るわず、足元、拡大基調にはないと考えている。本格的な回復は 2025 年度以降になる見通し。

風力発電翼以外の一般産業用途については、第 3 四半期で中国・アジア市場で需要の落ち込みが大きく、上期堅調に推移した欧米の圧力容器向けではサプライチェーンにおける在庫調整があり、需要軟化が見られた。圧力容器の調整は一時的であり、第 4 四半期は回復に向かう見通し。産業用途は 24 年度中には調整が完了し、需要は上向いてくると見ている。

<環境・エンジニアリング>

Q. 第 4 四半期の見通しについて解説いただきたい。

A. 環境・エンジニアリングセグメントについては、国内のエンジニアリング子会社、建設子会社、水処理エンジニアリング会社が期末に向かって工事が進捗していくので、もともと第 4 四半期に利益が集中する傾向がある。

水処理事業については、米国、中東向けの逆浸透(RO)膜が引き続き堅調に推移する見通し。エンジニアリング子会社はプラントや FA 工事の進捗やエレクトロニクス関連装置の出荷拡大を見込んでいる。

以上